

Title	松本芳夫先生を悼む
Sub Title	
Author	太田, 次男(Ota, Tsugio)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1982
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.19 (1982.) ,p.437- 440
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	阿部隆一名誉教授追悼記念論集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000019-0437

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

松本芳夫先生を悼む

初代本文庫文庫長松本芳夫先生は、昭和五十七年十二月八日老衰のため逝去せられた。享年八十九歳。先生は明治二十六年八月、和歌山県東牟婁郡下里村に生れ、同四十年和歌山県立新宮中学校に入学。二年生の頃より脚氣を病み休学を続け、ために、海軍兵学校に入り海軍軍人たらしとする夢は破れ、多感な少年を内省的たらしめた。同四十五年上京し、私立郁文館中学校に転じ、翌々年同校を卒業。大正三年、令兄実三氏の友人鈴木錠之助氏に勧められ慶應義塾大学部予科（史学）に入学。その頃令兄は本郷の帝大学生で、内村鑑三門下として後の東大総長南原繁氏外数人と信仰グループ白雨会を結成、先生も兄君の友人と親しく交わり、思想や人生に関し影響を受けた。大正八年大学部を卒業、直ちに義塾商工学校教員に任ぜられた。当時、義塾史学科は創設後間もなかったが、主任の田中萃一郎先生を中心に教授陣も充実し、生新の氣に溢れていた。大正十年十一月には早くも雑誌「史学」が創刊（松本芳夫・松本信広・飯田忠純企画）された。先生は田中先生を終生敬慕して止まず影響を蒙るところ最も大であった。川合貞一先生の講ずる民族心理学も学問の方法上示唆に富んでいた。丁度その頃津田左右吉博士の『神代史の新しい研究』が刊行され、それによって一層方法的自覚を促され、これを批判しつつ『神代史研究』（大正九年刊）が成った。先生の最初の学問的著作であり、その後の研究上の進展がここに予見される。大正十三年に、少し後輩に当る松本信広先生の尽力により柳田国男先生を史学科講師に迎え、出講は昭和三年度迄続いた。これより先、大正九年に両松本先生他の主唱による民俗・民族懇話会ともいふべき「地人会」の発足がその下地にあった。これが機縁になって『熊野民謡集』

(『炉辺叢書の内、大正十二年刊)や、後年の『熊野民俗記』(昭和十八年刊)所収の資料が蒐集された。先生はこの分野に終生変らぬ関心を示されたが、専門領域である古代史研究と民俗学とがどう交っているかは後考を俟ちたい。大正十二年、大学予科教員兼専門部(後の高等部)教員に就任。昭和三年九月、欧米に留学を命ぜられ、各地を巡って同五年十二月帰朝、次で翌六年には文学部助教教授兼大学予科教員、同八年には文学部教授に任ぜられ、国史科主任教授としての重責を担い、主として古代史の講義・演習を担当した。先生の古代史家としての学問的業績は、帰朝後より終戦迄の間に執筆されたものが多く、昭和三十四年に義塾賞を受けた『古代日本人の思想』(同年刊)は、戦後執筆された学位論文「古代日本人の政治思想」も収められ、その代表的著作といえることが出来る。

昭和二十四年以降、新制大学が発足するようになると、先生は一学究として研究に専念することが次第に許されなくなつた。外では文部省の各種委員を委嘱され、塾内でも多くの役職が待ちかまえていた。昭和二十三年一月、諸大に先がけて義塾に大学通信教育部が開講され、同年五月先生はその第二代部長を兼任された。当時の奥井塾長も熱心であったが、先生は精力を傾けて大学としては全く新しい未経験の事業の発展のために粉骨砕身し、その啓蒙発展を計るための講演会等には率先して全国くまなく出張し、その足跡を印しない県は殆んど絶無といわれた。その執筆になる通信用テキスト「国史」「史籍解題」も刊行された。五年を超える任期を終え二十八年九月、部長の職を辞し、翌十月には新に文学部長並びに大学院文学研究科委員長に任ぜられた。この年は先生の還暦に当たっていた。任期は二期四年に及んだが、学部各科のエゴを厳しく抑えようとすると、相互の融和を計り、また、比較的若い層の意見を積極的に採上げるなど、多くの人から名部長と謳われた。

これより先、昭和初年に、故麻生太賀吉氏は東洋文化の研究所として財団法人斯道文庫を福岡市に設立されたが、所員による顕著な業績もあがり、早くから著名な存在であった。小泉信三先生の直弟子であり、経済学部出身の塾員

大塚英雄氏が長くその主事の職にあり、戦火の下身を挺して貴重な蔵書を安全に守ったことは長く記憶されるべきである。その後戦災を被った同文庫の後始末をしたのは阿部隆一氏である。終戦後すべての機能を停止した研究所の継承を念願された麻生氏は、時勢に鑑み、その新しい発展を義塾に託すべく、昭和三十年の頃、全蔵書約七万冊の寄贈を申出られた。その寄贈が決定し、実際に書物が着荷したのは三十三年四月十四日であり、取敢えず日吉の旧寄宿舎南寮を改造してここに収納された。その後二年余の準備期間を経て、当時の図書館長野村兼太郎先生等の設立準備委員により組織などが慎重に審議された結果、現在みる如き研究所としての骨格構成が出来上り、三十五年十二月一日をもって、慶應義塾大学斯道文庫（三十七年に「慶應義塾大学附属研究所斯道文庫」と改められた）として前記南寮内に開所した。松本先生はその初代文庫長に選任せられ、阿部隆一氏が主事としてこれを補佐した。私立大学が名実兼ね備えた研究所を運営することは決して容易いことではない。義塾は当時まだ多難の折ではあったが、幸にして高村象平塾長を中心にして野村先生をはじめ設立委員の強い支持を得て、文庫研究員はすべて専任者をもって充てるといふ、研究所としては要ともいえる原則が貫かれ成文化された。また、学部と研究所との関係も、従来の国立大学の例などに徴すれば種々問題が多い。草創の時期に当り、先生はこれまでの経歴を生かし、上にあってよく大局を把握し、研究所としての基礎を固めることに全力を傾けられた。文庫員の正式の発令は三十六年四月一日であり、研究所としての本格的な活動はこの時から日吉に於て始められた。ご自宅から近くでもあったが、先生はここによく足を運ばれ、文庫員の仕事に触れ、皆が一堂に会する機会を進んで作られた。正面玄関入口に掲げられた「斯道文庫」という板書は先生の筆になる。南寮の周辺は自然がまだ生きており、名も知れぬ種々の野草が花咲き、大小の山鳥も飛んできては庭先におり立った。春には先生ご夫妻を囲んで花見を催したこともある。翌三十七年三月には、文庫員の研究成果を発表する「斯道文庫論集」創刊号が刊行され、研究員全員が執筆した。先生は「創刊の辞」を書かれ、また表紙の墨

書誌名もその筆に成り、以後現在に及んでいる。百年の記念事業の一端として三田の図書館の増築も含まれ、工事の完了をまつて、十月に文庫は三田の図書館内に移転した。「斯道文庫書誌叢刊第一」に当る『江戸時代書林出版書籍目録集成』一が刊行されたのは十二月であり、監修者として先生は序文を草された。翌三十八年は先生の古稀の歳に当る。先生が長年育成せられた三田史学会は寿を祝し「史学」第三六一・二・三を古稀記念号として刊行、これを献呈した。当文庫論集第三輯も同様の記念号として年を越して刊行し、これを献呈した。元来頑健であられ、その上酒も煙草も嗜まれない先生は、この年なお矍鑠と活動され、求めに応じ、三月刊、当論集第二輯には「山片幡桃の歴史観」を寄稿せられた。先生は早くからわが国歴史観の変遷に関心を懷き「歴史家としての福沢諭吉先生」(「史学」一三三・昭和九)「古代日本人の歴史思想」(昭和十六)「白石の史学」(「史学」三一四・昭和三三)等があるが、いまこの篇により終止を打たれた。同時にこれは先生の学術論文としては最後のものである。昭和三十九年、先生の文庫長としての任期はまだ満了しなかったが、この三月をもって定年により退休せられ、従つて文庫長の職も辞任され、佐藤信彦文庫長に替った。先生はその後も屢々文庫に立寄つて歓談を楽しまれ、同時に論集刊行の督促の言葉をきまつて付け加えられた。先生の内部には幼時以來熊野が永遠なるものとして生き続けておられたのであろう。晩年になつてつれ、何時も話題が落付くところは熊野であり、そうなることがまたわれわれ聴く者にとつては何よりの楽しみであつた。中学時代の恩師川出麻須美翁の指導により始められた和歌や長詩は昭和三十九年に『肖像』として刊行された。この一卷は他のどの書物よりも自身をよりよく表現していて尊いと書かれたあとがきが心に残る。